

## 仕事を超えたところから福祉が始まる サラリーマン介護職

福祉学科のある大学を卒業して選んだ道が地元の老人保健施設でした。そこで相談員として働きながら数多くのことを学びました。

理事長からは先を見る視点。例えばデイサービスの利用者さんが休んだ場合、普通なら休んだという報告だけで終わります。でも理事長からは一人休むことで経営にどういった影響が出るかなど、常に上の職種の目線を意識するよう指導されていました。当時は面倒くさいと思っていましたが、後に独立したときに最高のアドバイスを受けていたことに気づきました。

介護保険導入直前に上司が退職し、私と栄養士さん2名で施設を運営したのもいい経験です。この他にもISO9001取得や、雑務のすべてを経験したことから、無意識に異なる視点で物事を考える習慣がついたといえます。

そして施設の入所者さんから「いつかやろうと思っていたらできなくなったりやろうと思ったときにしておかないと後悔するぞ」と言う教えをいただきました。

た。介護保険前は元気な入所者さんも多く、人生の先輩からいろいろ学ぶことができました。

## 独立型居宅介護支援事業所の設立

満足していた施設時代でしたが、どうしても制度の中で縛られるのが窮屈になってきました。もっと早く相談ができていたら、業務にはないがこれができるばもっとその人らしい生活が送られるはずなのに……。ケアマネの資格を取得した瞬間僕は独立を決意しました。そのとき僕の心の中にあつた思いは「本当の福祉は仕事を超えたその先にある」と言うものでした。

その後、妻と2人で事業所を開設。世間で困難事例と呼ばれるケースを中心に対応ができる事業所として働き続けてきました。身寄りがない利用者さんの場合、死後の対応を一緒に話し合いケアプランに位置づけしました。亡くなる場所、その後の対応なども計画。亡くなる直前に、実は……とご家族がいるこ

とを教えてもらい、そこからご家族と相談を開始しました。いろいろあり、ご家族の気持ちが悪く着くまでということ、最後は遺骨を預かり、1年後実家にお届けに行ったこともあります。

自分に何ができるのか。それを考えながら活動し続けた日々でしたが、どうしてもうまくできない壁にぶつかり、思うようにできなくなりました。それが「行政の無理解」と言う大きな壁でした。

**やると決めたら前しか見ない！  
気がつけば立候補**

**挑戦を決意した理由**

介護保険は国の法律で動いていますが、その対応は県や地方自治体の判断に委ねられています。そのため担当者が変わるたびに解釈が変わったり、できなくてきかないが変わることもよくみられました。それに対して苦情を言っても僕達業者

は相手にされません。それは僕達の後ろで困っているのが利用者さん達だと言うことを理解してくれないからだと感じていました。それでも何度も話に行つたとき、こんな言葉を言われました。「私達は実地指導できるんですよ」もう現場から福祉を変えることはできない。そう感じた瞬間でした。

県の指導も厳しくなり、研修で「あなた達ひよこちゃんは、こんな計画でお金をもらおうとしているんですか」と言いだす職員も出てきました。僕達が厳しくされるのは仕方がない。でもその先で苦しんでいる利用者さんを誰が助けるのか。そう考え政治家にも相談にいきましたが、親切に聞いてくれても結局変わることはありませんでした。

優しさだけでは改革はできない。本当に現場を理解している人が政治の場で話してくれない限り変わらない。誰かいないのか……。そんな時、ある人が声をかけてきました。「もう山口さんが政治家になればいいのに」。その瞬間、気づいてしまったんです。「そうだ、自分がやればいいんだ」と。ここからすべてが動き始めました。